

進化・成長を続ける国 バングラデシュ



高橋 哲美 (たかはし てつみ)

前・在バングラデシュ日本大使館二等書記官

1991年北海道開発庁(現国土交通省)入庁。2010年4月から13年3月まで在バングラデシュ日本大使館経済・経済協力班に所属、経済協力を担当。現在、北海道開発局札幌開発建設部千歳空港建設事業所副長。

(写真の橋は、日本がアジア世界銀行との協調援助で建設した「ジャムナ多目的橋」)

バングラデシュのイメージ

みなさんは、バングラデシュという国についてどのようなイメージを持っているでしょうか。最近ではテレビで取り上げられることも多くなってきましたが、北海道から見ると、正直あまりなじみのない国の一つではないかと思います。もし知っている人がいたとしても、これまでは、発展途上で「貧困」「自然災害」「感染症」など、ネガティブなイメージが強いのではないのでしょうか。

しかし、ここ数年では年5～6%の経済成長率を維持しており、2021年までにはマレーシアなどのような中所得国入りを目指している国でもあります。

ここでは、バングラデシュという国がどのような国であるか、バングラデシュに住む人たちがどのような生活をしているかについて紹介します。

バングラデシュという国

バングラデシュは南アジアに属しており、インドの東側に位置します。国境の大部分がインドと接しており、南東の一部だけミャンマーと接しています。

面積は144,000km²と、日本の約4割程度しかなく、そこに約1億5,000万人以上が住み、毎年1.3%以上の人口増加率を維持し続けている、都市国家を除くと世界一の人口密度国となっています。

また、国土の約8割が海拔9m以下の沖積平野となっており、河川の氾濫やサイクロンの襲来など、水害に対して脆弱な国土となっています。これまで、1991年のサイクロンでは14万人、最近では2007年のサイクロン「シドル」で3,600人以上が亡くなるなど、常に自然災害の脅威にさらされています。



バングラデシュ

バングラデシュの緯度は、台湾と同じくらいでありながら、その気候は雨季と乾季がはっきりしています。雨季は高温多湿で35℃以上の気温が続き、生温い空気が肌にまとわりつきます。フラッシュと呼ばれる瞬間的な豪雨（日本でいうゲリラ豪雨のようなもの）により、排水事情の悪い道路が冠水することもしばしばあります。逆に乾季はほとんど雨が降らないため、街中が非常にほこりっぽく、目や鼻、のどなどの粘膜を痛める人が多いと聞きます。また、12月から2月にかけての気温は最低で10℃を下回る日もあり、暖房の概念がないこの国では非常に寒く感じ、北部では亡くなる方も出ています。

首都ダッカは人口約1,200万人ともいわれるほどの人口が密集し、地方からの移入者もあり、増加の一途をたどっています。ダッカでは街の大きさに対する道路面積の少なさ、そこを大量の自動車とリキシャ（人力車）や手押し車が併走している上に、一方通行を逆走するといった交通マナーの悪さ、さらにこの状況を

解消するための高架橋建設が道路上で行われることでさらに道を狭くしているといった状況により、常に渋滞が生じています。

また、全国的に電力事情が非常に悪く、ダッカでもエアコンの需要が高くなる雨季には、供給が間に合わないため1日に1時間おき12回の計画停電が実施されていました。もっとも、最近のアパートではほとんどが自前の発電機を備えているため、生活自体にはそれほど大きな問題となっていませんでしたが、地方へ行くときと連続10時間といった停電もあり、冷蔵庫があっても食べ物を保管できないといった状況が今でも生じているとのことでした。

バングラデシュの方たちは非常に人懐っこく、街を歩いていても「ハロー、ボス。ジャパニ？」と、全く知らない人が気軽に声をかけてくれます。人と人の距離感が近く、地方へ出張等に行ったときなど、外国人が珍しいのかだんだん人が集まってきて、気がつくともまるで「ハメルーンの笛吹き男」のように、自分の後ろには大人子ども関係なく50人くらいの人だかりができていたこともありました。

バングラデシュの方たちは、自宅に人を呼ぶことが好きで、決して豊かな生活をしている方でもなくても食事に誘ってくれます。もっとも食器を見ると衛生的に“ちょっと危ないかな”と思えるような場合も見られ、相当腹をくくってごちそうになったこともありました。日本では「おもてなし」が流行語になりましたが、家で食事をごちそうすることがバングラデシュ人流の「おもてなし」の一つのようです。



雨季のダッカ市内



ダッカ市内の交通状況



バングラデシュの子どもたち（南西部のジョソールにて）

日本との関わり

私の在任中には、日本・バングラデシュ国交樹立40周年記念式典が行われました。日本は、バングラデシュ独立直後の1972年にいち早く独立を承認して国交を結んでいます。このことが親日的な国民感情の根底にあるようで、バングラデシュに対して日本が最大の援助国の一つであることと相まって、日本という国と日本人に対して良好な二国間関係を維持しています。東日本大震災のときにはダッカ大学をはじめ、多くの場所で募金活動が行われており、日本のために祈りを捧げる姿が見られました。

また、バングラデシュは、中国やベトナム等に次ぐ潜在的な海外生産拠点の一つとして国際的な注目を集めており、ウォルマートやGAP、H&M、ZARA等、欧米の大手繊維関連企業が進出しています。日本企業も2013年2月現在、155社が進出しており、09年1月か



食事風景（西部のラッシャヒにて）



ダッカのバスターミナルでのストリート・チルドレンに対する授業風景（日本の援助で日本のNGOが支援）

らの約4年間で2倍以上に増えています。特に08年に進出したユニクロは、13年にダッカ市内に販売店を2店舗開設し、生産地としてだけでなく、消費地としての開拓を始めています。

日本のバングラデシュに対する援助は多岐にわたっており、国同士だけでなく、人と人とのつながりが深いものとなっています。経済成長を支える運輸インフラの整備や発電所・送配電網を整備して電力供給の増加を図るほか、災害や防災のための支援、母子保健・初等教育・安全な飲料水の供給など、ミレニアム開発目標（MDGs）^{*}の達成に貢献するための支援を行っています。また、日本が多くの留学生を受け入れていることに加え、日本のNGOとの連携や国際協力機構（JICA）のボランティア等による地域に密着した支援、バングラデシュのNGOが行っている現地での活動に対しても支援しており、このような人的支援がバングラデシュの国民に対して親日的な感情を意識させることにつながっています。

光と影

現在のバングラデシュ政府は、2021年までに全国民が中所得国レベルの生活を享受できる社会を目標として掲げ、着実な経済成長を続けてきていますが、反面、全人口の80%が一日の収入が2ドル以下といった状況が続いており、所得格差が拡大しています。ダッカのみならず地方の中核都市においてもスラムが存在し、多くの人たちが住んでいるのが現状です。



ダッカ市内 スラムで生活する人たち

※ ミレニアム開発目標

国連にて21世紀の国際社会の目標として「極度の貧困と飢餓の撲滅」「初等教育の完全普及の達成」「ジェンダー平等推進と女性の地位向上」「乳幼児死亡率の削減」などの8項目を目標として掲げており、2015年を達成期限としている。

また、最近では、物価上昇に伴いインフレ傾向が進んでいることや、13年4月に1,100人以上の方が亡くなった縫製工場の倒壊事故、そして賃金を含めた労働条件・労働環境の改善を求めて行われている縫製工場の労働者によるデモとそれを阻止するための治安当局との衝突が発生しています。さらに、帰国直前であった13年1月頃から、5年ごとに行われる選挙に向けて与野党の対立が激しくなりはじめ、野党による現政権への批判が「ハルタル」といった集団的なゼネストになり、鎮圧する治安当局との衝突、そして衝突により負傷者が発生し、そのやり方に対し野党が反発してまたハルタルを実施する、といった悪循環が生じました。大使館では、ハルタルになると、在留邦人が暴動に巻き込まれることを防ぐため、外出禁止を呼びかけました。また、バングラデシュ人にとっても、ハルタルにより地方からものが入らなくなることにより、一時的に物価が上昇して生活を圧迫するだけでなく、交通機関がマヒし、経済活動への影響も出るため、反対する者も決して少なくなかったようです。ちなみに、選挙は14年1月5日に投票、即日開票され、最大野党のバングラデシュ民族主義党（BNP）がボイコットしたことで、与党であるアワミ連盟が圧勝しました。現在では、選挙前のような政治的な対立も弱まり、かなり落ち着きを取り戻しているとのこと。

急激な変化

バングラデシュという国では、私の在任中の3年間だけでも、多くの変化が生まれました。ダッカへの人口集中が進んだことで盛んにアパート等の建築が行わ

れ、また物価上昇のため、家賃相場が1.5～2倍に高騰しました。また、渋滞を避けるためか、オートバイと自転車の数が急激に増加しました。それから街中にファーストフード店やちょっとしたカフェっぽい店など、外国人でも入りやすい店が増えたような気がします。これらの変化は、バングラデシュの経済発展に伴い中流階級が増えたことと、若い世代がインターネット等により欧米の文化に触れることが多くなったために生じた変化ではないかと考えられます。

そして何よりも、日本企業の進出が増えたことで、在留邦人の数が着任時より約300人増えて853人（2012年10月1日現在）になり、日本では出会う機会のないような様々な職種・立場の日本人と出会うことができたことは、帰国してからの大きな刺激となっています。

バングラデシュから見た日本

この国に住んでみると、日本と比べて不自由な点が多く、思いどおりにいかないことばかりでしたが、反面、日本の経済的な豊かさと便利さを改めて痛感させられました。その一方で、「住めば都」というわけではありませんが、どんなところでも住めばそれはそれで十分生活できることを知ると同時に、バングラデシュ人の心の温かさや面倒見の良さ、素朴さに触れ、日本は豊かさの代わりに何かなくしてしまったものがあるのではないかと感じました。

バングラデシュは多くの問題を抱えている国ですが、それゆえに人の温かさに加え、大きな可能性を秘めた国であることを実感した3年間でした。



ハルタルで燃やされたバス（2013年1月31日新聞記事より）



南部ピロジプールの「青少年の自立支援活動」の会場で子どもたちに囲まれて（日本の支援で日本のNGOが実施）